



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.29

過労死をうむ背景を考えよう

働き過ぎて労働者が死んでいく。過労死と言われる。この言葉は「karoshi」と世界で紹介されるほど、日本の産業界の特徴にもなっている。1988年に過労死は社会問題となり、全国の弁護士が連携して初めて「過労死110番」を開設した。しかし、国や医学界は「働き過ぎて人が死ぬ」ということをなかなか認めなかった。過労死が「労働災害」として認定されたのは、2007年のことである。それから、すでに10年以上が過ぎる。それなのになぜ、まだ同じような事件が起きるのだろうか。

また、過労死が頻繁に起きていても、防止対策は遅延として進んでいない。「過労死等防止対策推進法」が施行されたのは、2014年(平成26年)11月である。

今も、労働が厳しく、若者が自らの命を絶つ事件も相次いで起きている。いったいこの国の仕事ってなんだろうか。労働基準法って役割を果たしているのだろうか。

次に紹介する「手記」は、過労死が「労働災害」と認定されるまでに、途方もない苦労を経験した人が書いたものである。じっくりと、読んで欲しい。

「おとうさんへの手紙」

東京都文京区 安田 秀美 (40歳)

1990年2月、環境調査会社勤務の夫が突発性心機能不全で死亡。当時40歳。

あなたは覚えているでしょうか。

長女の志歩が2歳のとき、朝出かけるあなたを見送りにてた玄関先で言いました。

「おとうさん、またあそびにきてね」。戸が閉まると、「おとうさんのおうちはどこなの?」と私に聞きました。あとであなたにその話をしたら、あなたは目に涙を浮かべ、なにも言いませんでした。そのころのあなたは1カ月370時間も働いていました。あなたの勤める環境調査会社では、騒音調査は24時間連続で、まる2日続くこともありました。そのうえ、人が不足し、大気汚染の調査も、途中から兼務することになりました。有給休暇は4年間でたった1日とれただけでした。

父親の参加の少ない家庭生活で、あなたの姿を子どもたちに感じさせたいと、おもちゃや絵本を買うにも「お父さんが一生懸命働いて買ったのだから大切に使ってね」と、ことあるごとに言い聞かせていました。あなたの姿を見たことのない人は、母子家庭だと本当に思っていたそうです。

あなたが亡^なくなってから1年5カ月。志^し歩^ほは5歳、美^み佳^かは4歳、保^ほ育^{いく}園^{えん}の年^{ねん}長^{ちやう}さん
と年^{ねん}中^{ちゆう}さんになりました。3人だけになってどうやって生活をしていったらいいのか、
なにも考えられず、あなたが生前^{せいぜん}残^{のこ}していた遺^{ゆい}言^{ごん}を頼^{たよ}りにいったんはいなかへ帰^{かえ}った
のですが、いまは都^と内^{ない}で男^{りゆう}子^{りゆう}寮^ぼの寮^{りゆう}母^ぼとして住^すみこみで働^{はたら}いています。子どもたち
に淋^{さび}しい思^{おも}いはさせたくなかったため、そして私^{わたし}自^じ身^{しん}不^ふ眠^{みん}症^{しょう}になり、薬^{くすり}に頼^{たよ}る生活^{くわつ}
をしたくなかったため、日^に中^{ちゆう}働^{はたら}いてクタクタになる仕事^{しごと}を選^{えら}んだのです。

子どもたちは成長するとともに、あなたのことはほとんど記^き憶^{おく}に残^{のこ}らなくなってい
くようです。それでなくても家^{いえ}ですごすことはあまりありませんでしたから、あなた
の印^{いん}象^{しょう}は薄^{うす}いのかもかもしれません。いまでも、あなたのいない生活^{くわつ}のなかで淋^{さび}しくは
ないようです。

子どもたちのあなたへの手^て紙^しです。一^{いっ}生^{しょう}懸^{けん}命^{めい}考^{こう}えていました。読^よんでくださいね。

おとうさん、やさしかったね。おとうさんありがとう。やさしいおとうさんだった
ね。あそんでくれてありがとう。ほんよんでくれてありがとう。だっこしてくれてあ
りがとう。かたぐるまもね。おもちゃかってくれてありがとう。

でも、もっとおもちゃかってほしかった。おふろでいっしょにあそんでほしかった。
もっとだっこしてほしかった。こうえんとかいろんなところにつれて行ってほしま
たなあ。 みか

おとうさん、げんきですか、しほはいまほいくえんにいっています。おともだちも
たくさんできました。せんせいはやさしいです。おともだちとなかよくあそんでいま
す。

ははのひにはおかあさんのえをかきました。ちちのひにもおとうさんがいないから
おかあさんのえをかきました。ほじょなしのじてんしゃにものれるようになりました。
とってもはやくのれるよ。うーんうれしかったよ。

おうちでは、おにいちゃんたちがだっこもかたぐるまもしてくれるよ。じてんしゃ
のりのれんしゅうもてつだってくれたよ。

おとうさんのゆめをみたよ。おとうさんとおかあさんとみかちゃんとしほとうたを
うたったんだよ。たのしかったよ。

あのね。おとうさんしんでね、おかあさんがいっぱいいたの。しくしくってね。
それでね、おかあさんに「もうおとうさんはしんでしまったんだからあきらめなさい。
そんなになくとおにいちゃんたちにきられるよ」っていったの。でもね、おかあ
さんまだなくんだよ。ときどき。「もうやめなさい」ってね、いうの。それからね、

「おとうさんのことはおぼえていてもいいからもうぜったいなくのやめなさい」ってね。

おとうさんなんてしんだんだろうね。はたらいてつかれたの？ きっとつかれてしんだんだよ。おかあさん。

あのね、しほね、おとうさんがほしいの。しゃしんにうつっているおとうさんほしい。

おとうさんがいきていたらね、いっしょにあそぶの。やさしいおとうさんだったからね、やさしくしてもらうの。「おとうさん」っていっちゃん。それからいっぱいいろいろなところに行くの。それからいっしょにおえかきするの。それでね、おとうさんのえをかくの。

おとうさん、げんきでね。さようなら。

しほ

お父さん、子どもたちの声が届きましたか？

あなたが仕事をしていたころ、毎晩（朝）帰宅の遅いのに私が心配して、転職をすすめたことがありました。会社をやめてほしいと何度も言いましたね。でも、家族のためにこれだけの仕事をしているのだ、社会的責任もあるのだと、そして私が自分の気持ちを理解してくれないと、あなたは言いました。そして死んでしまった。あなたが守りたかったものはなんだったのですか。死ぬほど大切にしていたのは、なんだったのですか。

亡くなってから、同僚の方に言われました。「子どもたちに誇れる仕事をした」と。あなたが生涯をかけてやりたかった環境保全の仕事はたしかに、だれにでもわかるほど素晴らしい仕事だと思うのです。そして真面目に努力して、コツコツと仕事をやりとげ、評価も受けた。やりたい仕事で死ねて本望ですか？ これは皮肉に聞こえるでしょうか。

日曜日の晩、前日出勤したまま帰宅しないあなたを、思いあまって迎えにいったことがありました。現われたあなたの目は血走り、目のまわりはどす黒くなっていました。帰宅のタクシーのなかでも仕事の話をつづつ。仕事という魔物にとりつかれたかのように、仕事以外の話には耳も貸さず…。本当に、真からの仕事人間なのだと思います。私がいくら言ってもわかってもらえないのは当然でしたね。

でも、どうしてそこまで追いつめられてしまうのでしょうか。会議のたびに徹夜で資料を作り、問題があると言っては暗い表情で帰宅し。あなたの遺品となった通勤カバンのなかには副社長が書いた社報の1ページのコピーが入っていました。くり返し読んだのでしょうか。ボロボロになっていました。

子どもたちが成長したとき、なんと言っ^{すがた}てあなたの姿^{つた}を伝えたらいいのでしょうか。
あなたが亡^ちくなって、あなたがなにを考えていたのかわからなくなってしまいました。
いまでもときどき、あの朝のことを思い出します。私が起^おきたとき、もうあなたは
寝室^{しんしつ}で、息もなく冷たくなっていました。私には、あなたに「ありがとう」も「さよ
うなら」も言う時間すらありませんでした。

前日、1年に何回あるかというほどめずらしく子どもたちにおみやげを買^{きたく}って帰^{かえ}宅^{たく}
し、ヘタヘタと座^{すわ}りこみました。でもその後、子どもたちに、笑顔^{えがお}でいかにも楽しそ
うに本読みをし、私には子どもたちの将来のことを話しました。まるでこの世でやり
残した仕事を最後に片づけるかのように「一家団樂^{いっかだんらん}」を演^{えん}出^{しゅつ}していました。子ども
たちにとって、買^{なんばい}ってきたおみやげよりも何倍か楽しい時間のプレゼントだったと思
います。

母子家庭^{ぼし}になって以来、本当にいろいろな経験^{さい}をしました。40歳^{しゅうしよく}近い女の就^{しゅう}職^{しよく}
は本当にむずかしいものです。「夫^{かろうし}が過^か労^{ろう}死^しをした」とか、「労災^{ろうさい}申^{しん}請^{せい}中^{ちゅう}です」と
言うだけで、不採用^{ふさいよう}になったこともずいぶんありました。「めんどうな問題^{もんだい}を持ちこ
まれてはたまらない」と経営者^{けいえいしゃ}は思うのでしょうか。つらい目にあっても、あなたが
疲^{つか}れながらも仕事に取り組んだ姿を思い出^しし、子どものためにがんばろうと必死^{ひし}でし
た。髪^{かみ}もチラホラ白くなってきましたよ。冬場^{ふゆば}の手荒^{てあ}れはひどかったんですよ。でも、
働^{はたら}いている手だ、遊^{あそ}んでいない手だ、子どもたちに自慢^{じまん}できる手だと思いました。

お父さん、あなたが生きた時代は日本にとってどんな時代なのでしょうね。命^{いのち}を、
人の生活^{いとな}の営^{いとな}みを、これほど大切にできない日本はひょっとしたら戦争をした時代
同様^{どうよう}、病^やんでいるのではないのでしょうか。子どもたちが成長し私の手を離れていくと
き、いまと同じような社会が彼女たちを待ち受けているのでしょうか。

1991年7月30日、労災^{ろうさい}の申^{しん}請^{せい}をやっと出^だしました。やっと、です。1年5カ月か
かりました。ここまで来るだけで、もうエネルギーを使い果たしたような気がします。
これほど暗くて重い宿題^{しゅくだい}をいつまでかかえていなければならないのでしょうか。

お父さん、どこかで私たちを見守^{みまも}ってください。そして、あなたが生きた時代がま
ちがっていたんだと思えるような未来^{みらい}が来るよう、子どもたちが巣立^{すだ}つころには、い
まよりも明るい社会^{いの}になるよう祈^{いの}ってください。

お父さん、ありがとう。

** 引用文獻 **

『過^{しあわせ}労死・残された50人の妻たちの手記 日本は幸福か』教育史料出版会
1991年 pp.10-15より (ふりがなは、倉橋がつけた)